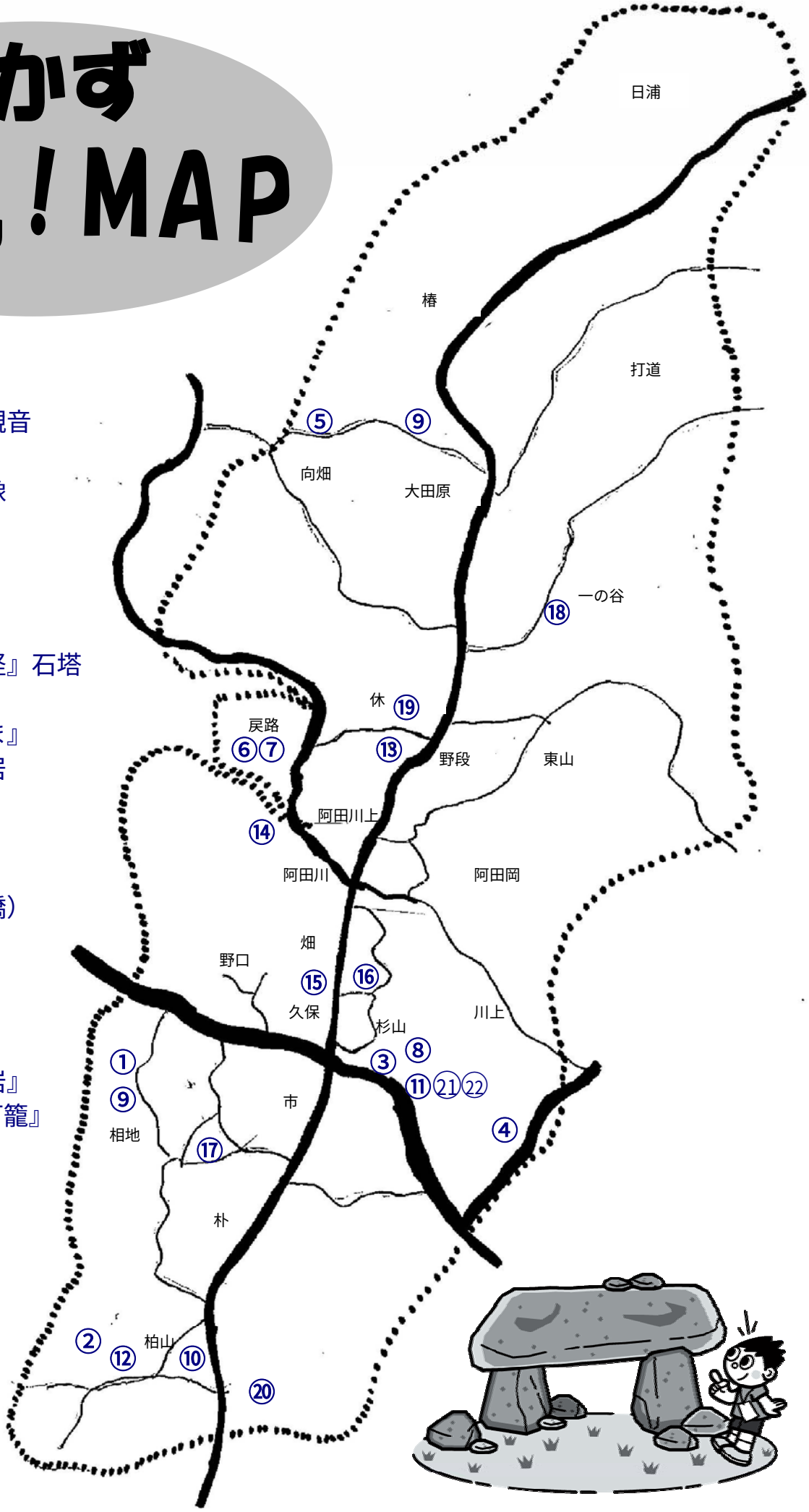
ながず
再発見

なかず 再発見！MAP

① 相地竹尾三十三観音
② 柏山八畳岩
③ 徳巌寺准胝観音像
④ やげん谷一里塚
⑤ 魚切の滝
⑥ 戻路杖踊り
⑦ 水ためしの神事
⑧ 『金光明最勝王経』石塔
⑨ 森の巨人たち
⑩ 柏山『かざぐるま』
⑪ 中須八幡宮石鳥居
⑫ 柏山『桜の木』
⑬ 峰市台地
⑭ あらたまの滝
⑮ 臥月橋（めがね橋）
⑯ 大溝水路
⑰ 早乙女の七人塚
⑱ 敦盛塚
⑲ 源平古戦場
⑳ 柏山『こも敷き岩』
㉑ 中須八幡宮『石灯籠』
㉒ 御田頭祭揉山



1 相地竹尾三十三観音

みなさんは、自分たちの住んでいるまちをどれくらい知っていますか？

自分たちのまちを再認識し、もっともっと中須を好きになってもらうためにも、身近にある、さまざまな史跡等を紹介していきます。

一回目は、『相地竹尾三十三観音（役行者（えんのぎょうじゃ））像』から。

相地竹尾に立てられた標柱から少し奥へ入った丘陵に観音像はありました。山道をぐるりと囲んだ三十三体の石造の観音像です。江戸時代中期、相地竹尾に移ってきた河村小兵衛という大富豪家の末子の八郎右衛門によって建てられたとのこと。

この観音像は、現在の周南市富田の平野石でできており、交通手段の発達していない昔に、よくこれだけの偉業を成し遂げたことと驚くばかりです。

長い間ずっと私たちのまちを見守っていただいていたんですね。今の私たちは、観音様の目にはどのように写っているのでしょう？これからもよろしくお願いします。

今回の取材にあたり、現地での案内やいろいろと教えていただきました渡辺武士さん、藤井豊人さん、どうもありがとうございました。

（『ふれあい中須』
平成２０年５月１５日号掲載）

2 柏山八畳岩

今回の再発見は、『柏山八畳岩』です。

標柱から、山道を三百メートル程登ったところにあると聞き、日頃の運動不足を悔やみながら、案内板を頼りに山道を登っていると、目の前に、大きな岩が姿を現しました。

大小二十個余りの岩石が集まり、周囲の木々と調和して自然の庭園を形づくっており、この場所は、『池浜公園』と呼ばれています。

石碑があり、そこには、『八畳岩』と名づけ開園しようとした医師池田愼哉と、その思いを引き継いだ薬剤師浜田睦士のそれぞれ名字の一文字を用い『池浜公園』と名付けたと刻まれています。

岩の上からの見晴らしは大変すばらしく、天気の良い時には、近くの下松笠戸湾から遠く九州国東半島までをも一望することができるのだとか。

岩の上に登り、しばらく遠くを眺めていると、何だがこの空間だけ、時間が止まっているような不思議な感覚に包まれます。

「何十年いや何百年前の人達も、きっと同じようにこの場所に立ち、同じ風景を眺めていたんだろうなぁ。そして、ここで何を思い、何を考えていたんだろう？」

ただ一つ言えることは、何年先になっても、ずっと今と同じ景色を眺めつづけることができるよう、この場所を、そして私たちのまちを、守り続けていかなければならないということですよね。

今回の取材にあたりいろいろと教えていただきました藤井泉雄さん、どうもありがとうございました。

（『ふれあい中須』
平成２０年６月１５日号掲載）

3 徳厳寺准胝観音像

今回の再発見は、『徳厳寺准胝（じゅんてい）観音像』です。

中須交差点から少し奥へ入った徳厳寺の境内に観音像はありました。

見るからにかなりの年月を感じさせる観音像です。

観音像を置いてある石には、徳厳寺の十世住職である寿山穏貞和尚の時代、文政十一年（一八二八年）に、造られたと刻まれています。

日本では、准胝観音単独での造像例はあまり多くなく、また、観音像を竜王二体が下から支えるという大変珍しいつくりをしています。

文政といえば江戸時代。私たちの身近にこんな貴重なものがあるとは、ただただ驚くばかりです。

色々と調べてみたところ、准胝観音は、『七倶胝仏母（しちくていぶつも）』とも呼ばれ、これは、『七千万の仏の母』という意味なのだそうです。

きっと、江戸時代から何年もの間、中須の人々や遠方からもさまざまな人々がこの場所を訪れ、それぞれの思い、願いをこの観音像にしてきたことでしょう。

今回私もこれを機に、あれもこれもお願いしようと思いましたが、あまり欲をださずにひとつだけ・・・・・・。

今回の取材にあたりいろいろと教えていただきました山城正道さん、どうもありがとうございました。

（『ふれあい中須』
平成２０年７月１５日号掲載）

4 やげん谷一里塚

今回の再発見は、『やげん谷一里塚』です。

国道３７６号線沿いにある標柱から４００メートル程山道を登ったところに一里塚はありました。

円錐台形状に土が盛られ、塚の周囲は、花崗岩の石組で覆われています。塚の前には、石碑があり、そこには、『小郡津市から１６里２０町　高森より３里』と記されています。小郡と高森を結ぶ山間の道（約７７ｋｍ）に２０ヶ所一里塚は作られましたが、『やげん谷一里塚』は、高森側から４番目になるのだそうです。

そもそも一里塚は、江戸時代、１６０４年（慶長９年）、時の将軍徳川家康が全国の街道に「一里塚」を作るように命じたもの。一里（約４ｋｍ）ごとに目印となるよう松や榎などの丈夫な木を植え、行程の目安、木陰による休息の場になるようはかったものなのだそうです。

この『やげん谷一里塚』も江戸時代に作られ、松の木が植えられていたようですが、残念ながら現在は枯れてしまいありません。ただ、道路の拡張や整備などにより他の一里塚が姿を消すなか、ほぼ当時のまの姿で残っているのは大変珍しく、周南市文化財にも指定されています。

この塚に腰かけしばらく目を閉じていると、仕事を終え故郷を目指す旅人が、私と同じようにこの場所に腰かけ、そして、微笑んでいる姿が頭の中に浮かんできました。「首を長くして帰りを待っている愛する家族がいる故郷まであと少し。」きっと、人と人を繋ぐ大切な場所であったことでしょう。

さてと・・今日は寄り道せずに真っ直ぐ家に帰るとするかな・・・。

（『ふれあい中須』
平成２０年８月１５日号掲載）

5 魚切の滝

今回の再発見は、『魚切の滝』です。

国道４３４号線川本から、大田原方面へ７００メートル程進んだところに、『魚切の滝』の標柱がありました。そこから細い道を下り、川まで降りると、外の暑さはうそのよう。とても涼しく、川を流れる水の音だけが響き渡り、そして、まるで私を出迎えてくれているかのように、赤とんぼが飛び回っています。

水の音、におい、この静かな空間の中にいると、なんだか心が癒されるのか、不思議と落ち着いてきます。

川に沿って奥へ進んで行くと、しだいに水の音が大きくなり、目の前に大きな滝が姿を現しました。高さは、６、７メートルはあると思われますが、たくさんの水が勢いよく大きな音とともに流れ落ちるその光景に、ただただ圧倒され、言葉を失ってしまうほどです。

しばらくこの滝の光景を眺めていると、私の頭の中に、こんな言葉が浮かんできました。

「行く川の流れは絶えずして、
しかももとの水にあらず・・・。」

『方丈記』（鴨長明）の有名な冒頭の一節です。

水は留まることなく絶えず流れ続けています。同じように思えても、一秒たりとも同じ景色ではありません。二度と戻ってくることはない、今、まさにこの瞬間、この時間を無駄にすることなく、大切にしていかなければいけないですね。

さて・・、大変文学的な頭になったところで、松尾芭蕉になったつもりで一句、

滝しぶき
横目にスイーッと
赤とんぼ

（『ふれあい中須』
平成２０年９月１５日号掲載）

6 戻路杖踊り

今回の再発見は、『戻路杖踊り』です。

九月十四日（日）、すばらしい秋晴れの下、中須小・中学校合同運動会が開催され、中学校の生徒十一名が、『戻路杖踊り』を披露しました。

まさに、気迫の演技。気合の入った杖さばきや声、息の合った躍動感溢れるその動きに感動し、写真を撮るのも忘れ、しばらく目が離せなくなるほどです。

時は、永禄十年（一五六七年）、美濃（現在の岐阜県）国主である斉藤龍興の家臣に墨川三輔という武将がいました。八月に織田信長に攻められ、斉藤家は滅亡してしまいますが、その時に、墨川三輔は、ここ周防国中須戻路へ逃れてきました。

そして、戻路の人々に、自衛手段として兵法武芸十八般の内、棒術の流れを汲むものを伝えたのが、杖踊りの始まりとされています。

以前は、見張りを置いて、稽古を行うなど、代々一家の長男にのみ伝えられる秘伝とされていたそうです。

『新しいモノ』がもてはやされ、『古きよきモノ』が次第に姿を消していく中、長い間多くの人々の努力により、このように伝統芸能が継承されているということに、この中須というまちのすごさを実感します。

これから先も伝統あるこの踊りを守り続けていくことはもちろんのこと、中須中学校の皆さんも、自分たちが伝統を継承しているんだということ、そして、この中須で生まれ育ったということに誇りを持って頑張っていってほしい・・そう感じた秋の一日でした。

（『ふれあい中須』
平成２０年１０月１５日号掲載）

7 水ためしの神事

今回の再発見は、戻路大番社の『水ためしの神事』です。

県道徳山光線沿いにある鳥居から少し奥へ入ると、そこには、木々の間から太陽の光がうっすらと差し込み、とても静かで神秘的な空間が広がっています。

そして、石段をあがった所に、大番社（大幡宮）がありました。

この場所では、毎年十一月二十五日に、『水ためしの神事』が行われます。

神饌の小餅十二個（閏年は十三個）、酒一合、小鯛二匹を素焼きの壺に入れ、樫の木の下に埋め、そして、一年後に掘り出し、当屋の主が、木片を壺の中に入れて前年の供物が溶けて水になっているその量を測り、その水の量が六合以上であれば、次の年は、干ばつにならないといわれています。

古い記録が残っていないため、詳しいことは分かりませんが、素焼きの壺の様子からしても、かなり古い時代から、この神事が行われていたのではないか、とのことでした。

私は家に帰り、この不思議な神事の話を、さっそく子ども達にしてみました。

すると、七歳の息子は、

『たからものみたいじゃね』

確かに、そもそもこういった神事が行われているということは、『水』というものが、この地域の昔の人々にとって農作物にはもちろんのこと、生活していくうえで必要不可欠な何よりも大切なもの、いわゆる宝物であったのかもしれません。

その話をそばで聞いていた三歳の娘がニコニコしながらうれしそうに、

『それなら、ドーナツいれよ～っと』

ちょっと違うけど・・・まあ、いいか。

今回の取材にあたり、いろいろと教えていただきました、林熊雄さんどうもありがとうございました。

（『ふれあい中須』平成２０年１１月１５日号掲載）

8 『金光明最勝王経』石塔

今回の再発見は、おだいし山の『金光明最勝王経（こんこうみょうさいしょうおうきょう）』の石塔です。

十二月の初め、この季節にしては比較的暖かい日の午後、おだいし山に登ってみました。

中須八幡宮の鳥居を抜けるとおだいし山へと続く山道があります。この場所には、明治六年、四国八十八箇所になぞらえて、中須八十八箇所霊場が開かれました。このうち、第一番と第八十八番の大師像は、徳厳寺境内のお大師堂に安置してあり、巡拝の起点となっています。

勢いよく登り始めたのもつかの間、日頃の運動不足を悔やみながら、ゆっくりと登っていると、頂上手前の少し開けた場所に、『奉帰命金光明最勝王経』と彫られた石塔が姿を現しました。

『金光明最勝王経』とは、奈良時代や平安時代に特に重要視された経典で、信仰者とその国家を守るとされ、聖徳太子や聖武天皇らがあつく信仰したようです。また、この経典をもとにして建てられた有名な建造物に東大寺があります。東大寺の正式名称は、『金光明四天王護国之寺』といい、いかにこの経典が国家の災いを鎮め、安全を守ろうとしたものであったかを伺うことができます。

これらのことから、よくはわかりませんが、この石塔に彫られている文字の意味は、『国を守るために、身命を投げ出しても、金光明最勝王経を唱え、仏の救いを信じます。』といったところでしょうか？

いずれにせよ、「国家を守る」経典とされている信仰が、この地に広がっていたということに驚き、そして、不思議に感じられました。

元旦の新春登山では、この石塔の前で、『東大寺建立の由来になったんだって。』などと雑学披露されてみてはどうでしょう・・・？

みんなこれを読んで知ってたりして・・・。

（『ふれあい中須』平成２０年１２月１５日号掲載）

9 森の巨人たち

スギ（相地竹尾）

ケヤキ（大田原河内神社）

今回の再発見は、『森の巨人』、平成二年に『徳山百樹』にも選定された中須にある大木たちをいくつかご紹介します。

まずは、相地竹尾にある『スギ』です。以前ご紹介した、竹尾三十三観音への入口から少し奥へ入ると、そこは、たくさんの木々たちに囲まれたとても静かな空間が広がっています。その中に、一際大きな木が姿を現しました。資料によると、幹の太さがなんと9メートル、樹齢二百年以上といわれています。高さは・・・よく分かりませんが、木のすぐそばから上を見上げると、どこまでもまっすぐと、まるで天まで届くのではないかと思えるほど、高く勢いよく伸びています。

周りのどの木たちよりも、そして、私たちの誰よりも長い間、この場所で、静かに、私たちのまちを見守ってきたようです。

次にご紹介するのは、大田原河内神社の『ケヤキ』です。

河内神社は、国道434号線川本から大田原方面へと進み、これも以前ご紹介した、魚切の滝を越え、大田原自然の家の少し手前にあります。川が静かに流れ、この清流と木立の静かなたたずまいの中に、『ケヤキ』はありました。

そのすぐそばには、大きな『スギ』が、まるで長年連れ添ってきた仲のよい夫婦のように、寄り添い合って空高く伸びています。きっと、お互いに励まし合い、助け合いながら生きてきたことでしょう。

今回の取材で、これらの木々たちの姿を眺めていると、なんだかすがすがしい気分になってきました。世の中では、毎日、事件やら不景気やら、暗いニュースばかり。でも、下を向いてばかりいるのではなく、この木々たちのように、上を向いて、まっすぐな、そして大きな心を持った人間でありたいものですね。

（『ふれあい中須』平成21年1月15日号掲載）

10 柏山『かざぐるま』

今回の再発見は、柏山『かざぐるま』です。

『かざぐるまがたくさんあって、すごいよ』そんな話を聞き、さっそく取材に行ってみることにしました。

公民館から県道三瀬川下松線を下松方面へと向かうと、柏山付近の道路沿いに『かざぐるま』はありました。普段、車の中から眺めることはありましたが、間近で見るのは、今回が初めてです。

大小様々な形、そしてカラフルな模様の鮮やかな『かざぐるま』たちが、風に吹かれてクルクルと回っています。

この『かざぐるま』は、柏山にお住まいの田中定さんが作っておられます。もともとは、3年くらい前、モグラよけ用にと作ってみたのがきっかけだそうです。木、アルミ、トタン、鉄や、家にあるいろいろなものを使い、あれやこれやと試行錯誤しながら、いつのまにやら、モグラというよりは、『かざぐるま』を作ること自体が楽しくなってきて、気づいたら全部で二十数個になっていたんだとか。『かざぐるま』を作っていくなかで、日々新しい発見があり、羽根の枚数や形、角度など何ひとつ同じものはないそうです。

この『かざぐるま』たちを眺めていると、なんだか子どもの頃に感じた忘れかけていたなんともいえない感覚がよみがえってくるような、そんな気がしてきます。

俳句でいうと『かざぐるま』は、春の季語。風と正面から向き合って、そして、風と会話しているこの『かざぐるま』たちが、他の誰よりも何よりも早く、春の訪れを感じているのかもしれないですね。

今回、突然の取材にもかかわらず、快くいろいろと教えてくださいました田中さん、どうもありがとうございました。これからも、道行く人を楽しませてくださいね。

（『ふれあい中須』平成21年2月15日号掲載）

11 中須八幡宮石鳥居

今回の再発見は、『中須八幡宮石鳥居』です。

中須八幡宮へ登る石段の手前に鳥居はありました。

この鳥居は、延宝六年（一六七八年）に造立されたもので、石鳥居では、市内で最も古く、県東部でも、これより古く造られたものは、数えるほどしかないという大変貴重なものです。

高さは、388cm。最上部の笠木（かさぎ）、その下の島木（しまぎ）が曲線をえがいて両端が反っており、先端が斜めに切られた明神形式と呼ばれる石鳥居です。

今から三百年以上も前に造られたという鳥居が、こんな身近な場所に残っているということに、大変驚かされます。

右側の石柱には、現在はほとんどその文字を読むことはできなくなっていますが、三行で次のような内容が刻まれています。

「中須に住む人々が力を合わせ、八幡菩薩を彫った石鳥居を八幡宮の前に建てた。この鳥居は、雲の上にまでも届くほど高く、神風の恵みが吹きぬけ、国は豊かで平和になり、栄える。」

そして、石文の最後は、こう締めくくっています。

『萬歳萬歳　長挙嘉也』

（万歳万歳　長くめでたいことが続く）

争いごともなく、平和で豊かな日々が続くことを願う気持ちは、昔も今も変わりません。きっと今の私たちと同じように、家族のこと、まちのことを大切に思い、みんなの幸せを願っていたことでしょう。

いつまでも、いつまでも、みんなが元気で、平和で、そして輝き続けることを願って…『万歳！』

今回は、内山高介さん所有の貴重な資料や、手嶋諭さんにもいろいろ教えていただきました。

どうもありがとうございました。

（『ふれあい中須』　平成21年3月15日号掲載）

12 柏山 桜の木』

今回の再発見は、柏山の『桜の木』です。

みなさん、『淡墨桜（うすずみざくら）』というのを知っていますか？

『淡墨桜』とは、岐阜県本巣市（旧本巣郡根尾村）の淡墨公園にある樹齢千五百年以上のエドヒガンザクラの古木です。つぼみの時は、薄いピンク色で、満開時には白くなり、散り際になると淡い墨色を帯びるという特徴から淡墨桜と呼ばれています。また、作家である宇野千代さんが、この桜の木を愛し、『薄墨の桜』という小説や、保護活動に関わったことでも知られています。

この『淡墨桜』の血脈を伝える桜の木が、ここ中須にあると聞き、さっそく取材に出かけました。滝の口公園へとつながる道を下り、柏山の河内神社の少し手前、道路沿いの開けた場所に、『桜の木』はありました。まだ桜の木としては小さく、『根尾谷の淡墨桜』ほどの風格はありませんが、たくさんの花を咲かせています。

この『桜の木』は、平成十年四月、根尾村の老人クラブの人達が中心となり『根尾谷の淡墨桜』の実から育て上げた苗木を、高藤務美さん（阿田川上）が手に入れられ、その苗木を中須に植えたなかのひとつなのだそうです。

決して大きくはないけれど、懸命に花を咲かせているその姿に感動し、『このまま順調に育ってほしい』と、まるで子どもの成長を願う親のような気持ちになりました。

今から何十年、何百年と時が過ぎ、人も時代も変わったとしても、きっとこの『桜の木』は、今私が眺めているのと同じ何も変わらぬ花を、この地で咲かせ続けていることでしょう。

『来年また来るからね』

今回の取材にあたり、いろいろと教えていただきました高藤さん、松村堅太郎さん、どうもありがとうございました。

（『ふれあい中須』　平成21年4月15日号掲載）

13 峰市台地

今回の再発見は、『峰市台地』です。

案内看板を頼りに道路を登ったところに『峰市台地』はありました。この場所からは、中須北地区の広い範囲を見渡すことができます。目の前には、田に張られたキラキラと輝く水に、青々とした木々、澄み渡る空の姿が映る何ともいえない大変すばらしい光景が一面に広がっています。それを知ってか、たくさんのツバメたちが、楽しそうに鳴きながら、気持ちよく私の周りを飛び回っています。

ここ『峰市台地』は、南北に長い中須のちょうど中央部に広がる台地で、室町時代には、上、中、下の三ヶ所で定期的に市が開かれていたといいます。

また、弘治三年（一五五七年）には、毛利元就がこの地に軍勢を集結し、沼城を攻略したのではないか、さらに、大正時代には、この地で草競馬が行われていたともいわれています。

そして、大正六年から二年がかりで足谷にため池が作られ、水路などが整備され、畑や山であったこの地を開墾し、現在の姿となりました。

これらのことから考えると、きっとこの場所は、昔の人々にとっても交通と人々が集まる大切で重要な場所であったことでしょう。

私にとっても、この場所は、大好きな大切な場所の一つ。この地で足をとめ、さわやかな風に包まれながら、目の前に広がる美しい光景を眺めていると、心が癒されるのか、普段の悩みや疲れも忘れ、すがすがしい気分になってきます。

美しい青空の下、この場所に腰かけ、しばらく時間が過ぎるのも忘れかけていたところ、子ツバメにせっせとエサを運ぶ親ツバメが私の目の前を通り過ぎました。

『いつまでも羽を休めていたいけれど・・・また、がんばるか。』

（『ふれあい中須』平成２１年５月１５日号掲載）

14 あらたまの滝

昭和３０年頃の滝

今回の再発見は、湖底に眠る幻の滝、『あらたまの滝』です。

『あらたまの滝』は、阿田川のバス停から、戻路方面へと進み、菅野ダムに注ぐ阿田川の下流にあります。この滝は、昭和四十年に、菅野ダムが建設されたことに伴い水没してしまい、現在は、その湖底で静かに眠っています。

冬の渇水期、数年に一度、ダムの貯水率が三十パーセント前後になった時、その壮大な姿を現すといい、ここ最近では、平成十九年の冬に、高さ十メートル、岩盤から三本の筋に分かれ勇壮に流れ落ちるその姿が目撃されています。

かつては、高さが二十メートル近くあったそうですが、湖底に長い間水没していたことにより、土砂の堆積や侵食で少しずつその姿を変えてきているようです。次は、私たちにどんな姿を見せてくれるのでしょうか？

風でゆれる菅野湖の水面を眺めながらこの湖底に眠る滝のことを考えていると少し複雑な気持ちになってきました。ダムができたことで多くの人々が恩恵を受けたその陰で、姿を消してしまった『あらたまの滝』。そして、何年かに一度だけその姿を見せるというこの滝に無性に会いたくなりました。でも、滝を見ることができるってことは、水不足ということになるし・・・。

『う～ん・・・でも、やっぱり見てみたいなぁ・・。』

（『ふれあい中須』平成２１年６月１５日号掲載）

15 臥月橋（めがね橋）

今回の再発見は、水の流れる橋『臥月橋（めがね橋）』です。

中須中学校前のバス停を少し北へあがったところに、鉄筋コンクリートでできた橋があります。そして、この橋をはさむようにして、道路沿いに、二つの石碑が置かれています。

『なんだろう？』私は車を止め、近くから見てみると、この石碑の一つに、『臥月橋（がげつきょう）』そして、もう一つには、『つきね橋』という文字がきざみこまれていました。

時は、明治三十六年（一九〇三年）、この地に、橋の上を水が通り、橋の下を人や車が通るめずらしいトンネル状の石の橋が作られました。

この橋は、『臥月橋』とか『つきね橋』と呼ばれ、『大空に半月が寝ているようだ』という意味からこの名前をつけたとも言われています。また、橋がめがねの形に見えることから、当時の人々は『めがね橋』とも呼んでいたといいます。

当時のこの辺りには、小高い山があり、山にそって水路が作られていましたが、道路が通ることになり、水路が分断されてしまうため考え出されたのが、道路の上を横切って水路を通すこの橋でした。

多くの人々の知恵と技術を集結して作られたこの石の橋は、道路の拡張のため取り除かれるまでの約七十年間、少しのくるいもなく、そして、静かにその役目を終えたといいます。

私が見たこの二つの石碑は、この石の橋のてっぺんに高く組み上げられていたもの（くさび石）で、この橋の記念の石として置かれているものでした。

この石碑たちは、自分たちの本来の役目を終えたその後も、新しい橋をはさんだこの場所で、ずっと、静かに見守り続けていたんですね。

『お疲れさま』そして、『ありがとう』

（『ふれあい中須』
平成２１年７月１５日号掲載）

16 大溝水路

今回の再発見は、『大溝水路』です。

中須中学校前のバス停の近くに久保の自治会集会所がありますが、そのすぐ側には、キラキラと輝く水が、絶え間なく勢いよく流れる水路があります。

そして、その水路の側には、『大溝改修記念之碑』と刻まれた石碑が建っています。

この石碑は、昭和五十四年から八年にわたり『大溝水路』の改修工事がなされ、その完成を記念して、昭和六十二年三月に建てられました。

この『大溝水路』には、有名な『大溝ばあさん』の話がこの地に語り継がれています。

江戸時代よりももっと昔、今から幾百年も昔の話。この地域にひとりのおばあさんが住んでいました。ここ久保地区には川もなく、家で使う水はもちろんのこと、田や畑に使う水も遠くまでくみに行くのが毎日の大切な仕事でした。

そこで、このおばあさんは、遠く川上川から溝を掘って水を引いてくることを思いつき、全長５キロ弱にもおよぶ用水路を完成させました。当時は、もちろん現在のような正確な測量器具はあるはずもなく、夜間、測量地点の松明のあかりで土地の高低を判断しながら手作業で工事を進め、ついにこの大偉業を成し遂げたといいます。

昔の人々の知恵と技術と大変な苦労に驚き、そして、この水路が、人々の生活だけでなく、心に安らぎを与え続けたことにただただ感動させられます。

これからの私たちにできること、それは、この水路を守り続けることはもちろんのこと、いつまでも、いつまでも、この『大溝ばあさん』の話を通じて、先人たちが残してくれた遺産を、語り継いでいくことなのかもしれないですね。

（『ふれあい中須』
平成２１年８月１５日号掲載）

17 早乙女の七人塚

今回の再発見は、『早乙女の七人塚』です。朴から相地に入る道を少し進むと、そこには、黄金色に輝く稲穂が一面に広がっていますが、その中に、ぽつんと立っている小さな石の塚の姿を目にすることができます。

高さ九十センチ、幅六十センチ、文字などは何も刻まれていませんが、石の様子からして、かなり古くからこの場所にあったことがうかがえます。

この石の塚は、『早乙女の七人塚』と呼ばれ、こんな悲しい物語が伝えられています。

昔、このあたりがおもな往還であったときのこと。七人の早乙女が初夏の日差しを受けて、早苗を植えていたところ、たまたまこのあたりを代官が通りかかりました。若い乙女たちはいつものようににっこりと笑顔であいさつをしました。ところが、この代官は何を勘違いしたのか、『武士を笑うとは何事か』と、むざんにもこの乙女たちを切り捨ててしまいました。人々はこのことを非常に悲しみ、あわれんでこの塚を立てたといわれています。

『早乙女塚』や『七人塚』についていろいろと調べてみたところ、『早乙女塚』と呼ばれるものは各地に数多く存在していますが、どれも同じように心が締め付けられるような悲しい伝説が存在しています。また、『七人塚』については、源平合戦で敗れ逃げのがれてきた平氏が悲運の最期を遂げた場所という伝説も多く残っているようです。

『なぜ同じような悲しい伝説が各地に残っているのか』、『なぜ七人なのか』、『伝説が伝える真の意味は何なのか』、次から次へと疑問がわいてきましたが、詳しい資料もなく、残念ながら解明することはできませんでした。

今後の研究課題とさせていただくということで・・・。

今回は、このへんで・・・。

（『ふれあい中須』平成２１年９月１５日号掲載）

18 敦盛塚

今回の再発見は、一ノ谷『敦盛塚』です。大田原方面へ向かう県道三瀬川下松線から市道一ノ谷線へ入ると、そこには、ため池がありますが、そこからさらに数百メートル程進んだところに『敦盛塚』はありました。

『敦盛』とは、平敦盛（たいらのあつもり）という平安時代末期の武将のことで、平清盛の弟である平経盛の末子、笛の名手としても知られています。

寿永三年（一一八四年）二月、平家一門として十七歳で一ノ谷（現 兵庫県神戸市須磨区一ノ谷）の戦いに参加。そこで、熊谷次郎直実（くまがいじろうなおざね）との一騎打ちを行った有名な場面が『平家物語』の中で語られています。

源氏の奇襲を受け、平氏側が劣勢になり騎馬で海上の船に逃げようとした敦盛を、直実が『敵に後を見せるのは卑怯でありましょう、お戻りなされ』と呼び止め、敦盛が戻って一騎打ちとなりますが、直実が敦盛を馬から組み落とし、首を斬ろうと兜を上げてみると、そこにはわが子と同じ年頃の美しい若者の顔があり、直実は戸惑います。直実は、助けようと名を尋ねると、敦盛は『お前のためには良い敵だ、名乗らずとも首を取って人に尋ねよ。すみやかに首を取れ』と答え、直実は涙ながらに敦盛の首を斬ったといいます。また、敦盛の腰にまかれた笛（小枝または青葉の笛と呼ばれる）を見つけ、戦の前の明け方に城から聞こえた笛の音の主が敦盛であったことを知り、武家の性と世の中の無常さを感じ、このことをきっかけとして、直実は、後に出家したといいます。

いつ、誰が何のためにこの『敦盛塚』を建てたのか、なぜ、『一ノ谷』なのか、残念ながらはっきりとは分かりません。兵庫の一ノ谷と同名であること、中須に隣接する須万の地名も兵庫須磨の地名から生まれたとも言われていること、そして、この『敦盛塚』。源平合戦と何か関係があると考えるのが自然だと思えました。

私は、いろいろな仮説を頭の中に浮かべながら、どこからともなく笛の音が聞こえてきそうな静かなこの場所を後にしました。

（『ふれあい中須』平成２１年１０月１５日号掲載）

19 源平古戦場

『みかげ石でできた一本橋』

『道標か？』

今回の再発見は、『源平古戦場』です。

『川久保川沿いの旧街道に、『戦石』と呼ばれる源平の古戦場がある』そんな話を聞き、藤井豊人さんご夫妻に無理を承知でお願いし、現地を案内してもらいました。

旧街道は、休の農道下休線から川久保川沿いにあります。この旧街道は、大田原や三瀬川に通じる唯一の街道で、むかしは、多くの旅人たちが行き来したといいます。

現在は、ほとんど訪れる人もいないのか、道が崩れていたり、木が倒れていたり、時には草をかき分けながら、まるで、子どもの頃にあちこち探検した時のように、ワクワクしながら、さらに奥へと進んでいきました。

途中の川沿いには、旅人が馬を洗ったといわれる『馬洗い場』や『田んぼ』のあと、そのための『水路』と思われるもの、みかげ石でできた『一本橋』、そして、街道の分かれ道と思われる場所に、ぽつんと石でできた『塚』が立っていました。この塚には、何か文字が刻まれています。『右・・・一ノ谷・・・左・・・』はっきりとは分かりませんが、おそらく道標なのではないでしょうか？

川を流れる静かな水の音を耳にしながらしばらく進むと、突然、大きな岩が私達の目の前に姿を現しました。

この岩は『牛』の形をしており『米食い岩』と呼ばれ、『本当に米を食っていた』という伝説が残っています。

岩は、頭が北、尻尾が南になっており、『北側の田んぼは、この牛が米を食べるので不作、南側の田んぼは、牛の排泄物が肥料となり豊作だった』といわれています。

さらに奥へと進み、源平合戦で敗れ、逃げてきた平氏が一ノ谷からこの地域にかけ源氏と一戦を交えた戦を記した『一枚岩』という岩があるといわれる付近を探してはみたものの、その岩や『古戦場』の跡も、残念ながら発見することはできませんでした。

この場所が『源平古戦場』であったかどうかは、今となっては分かりません。ただ、以前ご紹介した一ノ谷に『敦盛塚』と呼ばれるものが存在していることなどから考えても、この場所がそうであったとしても不思議ではない・・・そんな気がしました。

さて・・・、次はどこを探検するかな・・・。

（『ふれあい中須』平成22年1月15日号掲載）

20 柏山『こも敷き岩』

『こも敷き岩』

『岩には一本の長い筋が・・・縄の跡か・・・？』

今回の再発見は、『こも敷き岩』です。

公民館から県道三瀬川下松線を南へしばらく進むと、道路沿いにたくさんの『かざぐるま』たちが、まるで私たちを出迎えてくれているかのように風に吹かれクルクルと回っている姿を目にすることができます。（柏山の田中さんが作っておられます。）そこから少し進むと、東へ伸びる農道若山線があり、さらに奥へ二〇〇メートル程入ったところに『こも敷き岩』はありました。

この辺りは、『若山』と呼ばれ、以前は田んぼが一面に広がっていたといいます。

この岩は、高さはありませんが、幅が約二メートル×四メートル、平らでとても大きな姿をしています。また、岩の表面には、文字などは刻まれていないものの、一本の長い縄の跡のようなものが残っています。

この岩については、こんな話がこの地に語り継がれています。

江戸初期の寛文四年（一六六四年）四月十六日の夜のこと。八幡宮が火事になり、なにもかも燃えてしまうことがありました。この時、神火（神聖な火）が、遠く離れた若山の岩に留まり、きらきらとまぶしいほどの光を放ったといいます。当時の人々は、『八幡様が災いを避けてこの岩に駐臨なさったのだ』と小祠（ほこら）をたて、『こも』を敷いて三年間鎮祭をしたといいます。

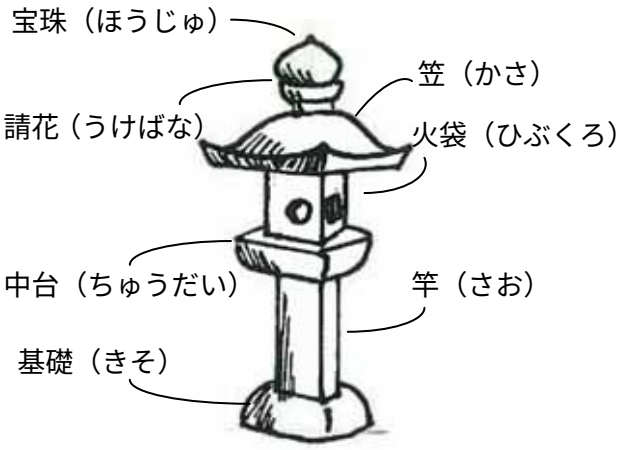
今となっては、事実がどうであったかはっきりとは分かりませんが、この岩に残る跡は、鎮祭を行った時のものなのかもしれません。

とても静かなこの場所で、そっと目を閉じると、当時の光景が、空を超え、時を飛び超え、ふっと私の頭の中に描かれ、まるで自分がその場に居合わせているかのような、なんともいえない不思議な感覚に包まれます。この場所が持つ不思議なパワーを全身に浴びて、心地よく吹く風の中に春の足音を肌で感じながら静かなこの場所を後にしました。

今回の取材にあたり、現地での案内やいろいろと教えていただいた、桶谷敏さん、手嶋諭さん、どうもありがとうございました。

（『ふれあい中須』平成22年2月15日号掲載）

21 中須八幡宮石灯籠



今回の再発見は、中須八幡宮『石灯籠（いしどうろう）』です。

すがすがしい日差しの中に初夏を感じさせる五月のある日、中須八幡宮へ行ってみることにしました。八幡宮へ続く道には、このすばらしい天気を喜んでか、たくさんのつつじの花が気持ち良さそうに咲いています。石段の手前に石鳥居がありますが、その少し手前に、この花たちに囲まれるようにして『石灯籠』はありました。

この『石灯籠』は、方形の竿を有する角竿四角型といわれる花崗岩製の『石灯籠』です。基礎の上には、角竿・中台・火袋・笠・請花・宝珠が下から順に乗っており、石の様子からしてもかなりの年代を感じさせます。火袋の屋根になる笠は、左右両端に向かって反りあがっているものの、その上部は、緩やかな丸味をおびており、また、最下部の足となる基礎の上部と火袋を支える中台の下部には、複数の蓮の花が彫られており、重圧感も感じさせる大変美しい姿をしています。

この『石灯籠』の竿には、『元禄七甲戌年（一六九四年）』という文字が、また、道を挟んだもう一方の『石灯籠』には、『宝永元甲申年（一七〇四年）』という文字が刻まれています。

『灯籠』について調べてみると、元は文字通り、灯（あかり）、籠（かご）であり、仏教の伝来とともに伝わり、寺院建設が盛んになった奈良時代から多く作られ、平安時代になると神社の献灯としても用いられるようになったようです。石でできた『灯籠』自体は古くからあったようですが、現存しているものでこの地にある『石灯籠』より古い物は、市内でも毛利家墓所に登る石段途中のものや、遠石八幡宮のものなど数えるほどしかなく、大変貴重なものだとわかりました。

この石灯籠が、夜道を照らしている光景を頭に思い浮かべながら、松尾芭蕉になった気分でまたまた一句、

月灯り
つつじに負けじと
あかりかご

（『ふれあい中須』
平成22年6月15日号掲載）

22 御田頭祭揉山

今回の再発見は、『御田頭祭揉山』です。

『揉山』とは、『久保神楽』、『戻路杖踊り』とともに、ここ中須地区に伝わる伝統芸能の一つで、毎年七月下旬に行われる中須八幡宮の豊作祈願の夏祭り（御田頭祭）において御神幸を迎える行事です。

中須八幡宮は、六五九年、宇佐八幡宮より歓請されたといわれる大変歴史のある古社で、『揉山』自体は、天明二年（一七八二年）から始められ現在まで続いているといわれています。

各部団ごとに『揉山』（約一・五メートル四方のやぐら）を作り、化粧をした五～十歳くらいの子ども二人を乗せて担ぎます。乗り子は、小太鼓を休みなく『トンテントン』と打ち鳴らし、合図によって山を下げ、すばやく回り、山を差し上げ、そして高く放り上げるという動作を繰り返し、更には、他の山と揉み合いながら練り歩く大変勇壮な行事です。

私が初めて『揉山』を見たのは二年前の夏。道路の側から見ていると、中須のまちに太鼓の音や掛け声が響き渡り、私のすぐ側で掛け声とともに山が回され、そして勢いよく高く放り上げられる光景とその迫力に、ただただ圧倒されました。また、一列で八幡宮へ向かっている山を見渡すことができる国道からの眺めが大変すばらしく、幻想的で神秘的な美しい光景が広がり、大変感動したのを覚えています。

『激しさ』と『美しさ』を兼ね備えたこの『揉山』は、今年は二十四日（土）に行われます。また、あの感動を味わえることを今から楽しみにしています。

『ワーレヨッサ』
『ヨーイサーヨ』

（『ふれあい中須』
平成22年7月15日号掲載）

平成２２年９月　第２刷発行

発行者　中須をよりよくする会

中須公民館